

A「刺戟の多い都でなくちや。か。まあ第一田舎にゐると、新しい畫を見る事が出来んから。之が吾等の大なる不幸といふものだ。」

B「見る事は七分といふぢやないか。ね。」

A「それはさうと、此間ね相田寅彦さんに會つて来たよ。ずうつと足尾銅山の方から、寫生して來られたのさ。それは、すばらしいものがあつたよ。かう赤い大きな岩があつてね、それが清い溪流に映つてゐるさま、目醒むるやうに出來てゐたつけ。その岩の上に、裸體の女が腰かけてゐるのさ。それから緑こき森林の畫もあつた。未成品だつたが、黄ろい三日月が深山を照してゐる凄いやうなものもあつた。大變益になつた。」

B「さうか僕も是非行つてみたいものだ。」

A「是非行つてみたまへ。油繪も二三あつた。君美校へ這入る積りなら、一年位東京で木炭畫を稽古しなくちや、餘程面倒なさうだぜ。」

研究所で二年もやつた奴が、飛び込むんだそうだから。研究所へはへるにしても、髮の毛を長く延してへたな熱をいふてゐる奴なんかにあつては、駄目だつて相田さんは云つたよ。ほんとうに、畫を以て生きんとするなら、上京して、眞面目に研究した方がいゝと言はれた。僕は肝に銘して來たんだ。」

B「矢つ張り上京しなくちやいかんのだね。僕の親父は許してゐるのだから、上京するかなあ。中學を卒へたはいゝが、かう定らずに家にゐるのも苦痛だから。どうせやらうと決心したん

たから。上京してそして大下先生が古來成功した偉人は、天才に加ふるに堅い意志があつたとか言はれたがこれだね。この堅固なる意志を以てやるのだ。」

A「撓まず屈せず、やつてゐるうちに、いろんな發見もするんだ。やたらに先を急いぢや駄目だ。上京したら、しつかりやり給へ。僕は家がゆるさんからね。行けんけれど。」

B「君今年の春、若松に夢二氏が來たつたさうだが、會つたか。」

A「知らん。」

B「さうか。あの人も時勢が生んだ寵兒だが、ポツとついた。マ

ツチの光りのやうなものだと思ふが。」

A「あ、あんなあそび畫は、眞似たくない。永くつゞかないさ。」

B「美術家には苦闘して大家になつた方が多いぢやないか。不折氏、三宅氏皆さうだ。」

A「さうだね。苦まんぢやうそだ。苦まんぢやうそだ。」

B「お互に努力しやう。さうだ。さうだ。」

(終り)

池畔の森に就て

水野 以 又

場所は上州赤城山頂、血の池の畔りである、偶作であるから、別段感想として書く程の事もないが、短時日の旅行の事であるから、緩くりとしても居られず、登山の三日目、見付け出した處で、此一ヶ所に全力を注ぐ可く、決心した、氣に入つたコン

ボジションであつた。赤城の夏は、自分が今迄の旅行中、最も嬉しく思つた處で、全山の緑も、此處程落付いた穏かな色は、未だ嘗て見た事がない、八月の中ばであつたが、天氣は非常によく續いた、けれども山上の事であるから、時々綿をちきつた様な雲が出て、午後には到れば、大抵は一帶に曇ると、毎日殆んど決まつて居る様であつた、描いたのは午前である、全面に日の當つた場合も、非常に面白く思つたけれど、前にも云つた通り、始終浮雲が出て、遠景を覆ふたり、又前景を曇らせたり、そうかと思ふと、或一部分へ、日の洩れる場合等、色々様々に變化して、丁度自然か自分に、或物を捉らへさせんとするかの様に思はれた。自分には前景の曇つた場合を、一番面白く感じ、楮筆を執つて見ると、其雄大な感じは、到底視る可くもなく、二度も三度も洗つては描き／＼し、途中で止めて、しまをふかとも思つたが、これ迄に費した時日が、惜まれて煩悶しなからも、描き續けて居る内、稍自分の意を得たる部分が出来たので、面白くなつて来た、そうなると、他の部分で、多少失敗しても、其部分が惜まれて、勢ひ骨を折る様な譯で、どうやら出来上る迄には、丁度八日間を費したのである、それでも、午前中、日の當つて居る時、遠景を描き、午後に至つて、曇つて来れば、前景の影の部分、いぢるといふ、苦しい策を講じた事も、三四回あつた様に覺えて居る、而し繪の製作其物は、兎に角、山頂たの静かな水を湛へた池の畔りに、たま／＼通ふ馬子歌の、山に反響する聲を聞きながら、靜かに繪筆を執る時は、あらゆる

る浮世の欲望も、打忘れて、全く自然に魁せられた、無我の境の人となつて、斯の道を研究しつゝある自分の境遇を、限りなく嬉しく、満足に思つたのであつた、物質に捉はれたる世の人皆は、恐らく此絶大の幸を知る事は、出来ないであるふ。

日比谷の午後について 後藤 工志

日比谷の午後について、何か感想を書けとのお話でムりました、が、感想をかく程の大したものでもありませんし、それに、又、深いかんがへがあつて描いたわけでもありませんので、おことわり申しましたが、是非に、との事でしたが、何か少し書いて見ようと存じます。

一體、私には、眼に見える總ての物から美を感受して、たゞちにそれをカンバスに歌うと云ふ様な事は出来ません。否、私の感覺はそれ程、鋭敏ではないのです。私の脳裏には常に私の憧憬してやまない何に物かが潜んで居ります。私はその憧憬して居る何に物か、いはゞ私の理想に適した處を選んで描いて居るのです。私の現在はそので満足して居ります、——たとへ未來は思想の變換と共に盛んななローマンチツクなものを描くか、又はアンプレツシヨニストになるか何に成るかわかりませんが、——日比谷の午後には、私の理想のある一部にあてはまつて居る處だと思つて下さればよいのです。

昨年の夏、ふと日比谷へ遊びに行きました。それは丁度、よく晴れた最夏の午後でしたから、總ては、ぎら／＼とかぢやき、